

# こころはからだの細部に宿る

小林隆児

西南学院大学大学院臨床心理学専攻  
感性教育臨床研究所

この四、五年、事あるごとに、学生や臨床家を相手に感性教育を試みているが、参加者の大半が異口同音に語るのは、関係の文脈を通して子どものからだの動きを見てみると、こころの動きが手に取るように感じられるようになるという実感である。それは私の解説を聞いて初めて気づく体験ではあるが、何を隠そう、私自身も母子ユニットでの新奇場面法で録画した映像データを母子一組につき何十回となく繰り返し見るなかで、母子双方のほんのちよつとした仕草やからだの動きの重要性を強く意識するようになった。そこに当事者のこころの動きが如実に示されていることを見取ったからである。その作業はちよつど実験室で繰り返し試験管を振っている研究者の姿と重なるものがあった。その場に参与観察しつつも、気づかない事象は実に多い。母子ユニットという今では考えられないほどに恵まれた環境であったからこそ実現できたことである。

「あまのじゃく」という独特な関係病理を捕捉することがで

きるようになったところから強く意識するようになったことだが、母子双方のこころの動きをからだの動きとしてはつきりと捉えることができるようになると、私の内面に大きな変化が起こった。私の脳裏に母子双方のこころの動きのゲシュタルトが明瞭に浮かぶようになったのである。

この種の体験は以前どこかで味わったことがあるな、と自分の過去を振り返って気づいたことがある。

私は小学四年生になると、母親の強い勧めもあつて珠算塾に通うようになった。コンピュータはもちろんのこと電卓さえなかった昭和三十年代中頃のことである。

当時から私には何か面白いことに出くわすと、無我夢中で取り組むという習性があった。珠算が性に合ったのか、通ううちに腕前はめきめき上達し、小学六年を終えるころには参段の免状を取得するまでになった。その中でもとくに私が魅了されたのは暗算であった。人が読み上げる数字（読み上げ暗算）、あるいは紙に書かれた数字（見取り暗算）を算盤なしで計算するというものである。最初は二桁（十の位）から始まり、次第に三桁（百の位）、四桁（千の位）、ついには五桁（万の位）の数字を十口（くち）、十五口ほど計算できるまでになった。この時、私の脳裏には目の前に算盤があるのではないかと思えるほど明瞭に浮かび上がり、架空の算盤を実際に自分の指で弾いているような感触を味わっていた。この体験は今までに味わったことのない快感で、味わえば味わうほど強まり、結果として腕前はめきめき上達したように思う。

自慢話のようで恐縮であるが、私が述べたかったのは、この

種の体験と同じことを今回の録画ビデオを繰り返し見ることで味わったような気がしたからである。

母子の関係病理を「あまのじゃく」として見て取ることでできるようになると、日頃の患者との面接で、患者と私のあいだに立ち上がるころの動きにも同様の関係病理を感じ取ることでできるようになったが、このときも私の脳裏には明瞭に患者と私のあいだのころの動きがゲシュタルトで浮かび上がるのを実感するようになった。

このような知覚体験はなんと表現するのだろうかと考えたとき、スターンが遺書となった書<sup>⑥</sup>で最後まで力説していた力動感 vitality affect による体験にもっとも近いものではないかと思つた。

以前、拙稿「関係からみた『勘と勘繰りと妄想』(土居健郎<sup>④</sup>)」を纏めた際に知つたが、土居は論考「勘と勘繰りと妄想<sup>①</sup>」でマイケル・シェファードの論文を引用して紹介している。そのなかに一九世紀に絵画の鑑定を開発したモレリについての記載があつた。絵画の真贋の鑑定で重要なことは、画家の特性は、たとえば、耳の形のように、画全体から考えれば一見とるに足りない細部の描き方に現れる。だから絵画の鑑定においては細部に着目しなければならぬとのモレリの指摘である。これから成句「神は細部に宿る」が生まれたともいわれているが、先に述べた私の体験もまさにそのことを指し示していると思われたのである。

生後七カ月の男児である。

母親の相談はつぎのような内容であつた。視線が合わない、

表情に乏しい、自閉症スペクトラムではないかという。具体的に聞いていくと、出産の時の産声を聞いたとき、これはおかしいと思つた。泣き声あまりにも弱々しく、「おぎや」と元氣よく泣かなかつた。その後、どんどん心配なことが増えていった。生後二カ月、縦抱きになると大丈夫だったが、なぜか横抱きすると、嫌がつてのけぞる。三カ月、抱っこすると視線が合わなくなつた。以後、どんどん心配は募つていったというものであつた。

面接室で、母親はソファに腰掛けていたが、子どもを私の方に向けて、膝の上に座らせていた。自分の方に向けて抱いていないのは、子どもが嫌がるからなのかなと想像しながら見ていた。私が気になつたのは、そのときの子どもの様子であつた。私の方を見つめていることが多いが、人見知りすることなく、自分を抱えてくれている母親の方に振り向くこともない。子どもを母親の方に向かせると、すぐに顔を横に向けて目をそらす。表情は硬く、あまりにもおとなしく、ほとんど身体を動かすことなく、じつとしていて。口元を閉じているが、妙に力が入っていることがわかる。周囲の刺激に圧倒され身動き一つとれない、私にはそんな深刻な状態に見えた。

ついで私は子どもを抱いてみた。とくに嫌がることもなく、ただじつと抱かれていた。全身に強い緊張が感じられ、あやしめても反応は乏しいことから、このような状態はかなりの長期間続いているのではないかと推測した。

母親の子育ての大変さを感じながら、母親自身の幼少期にまで面接は進み、母親自身の両親について尋ねた。すると両親、それもとりわけ父親から非常に厳しく育てられたことが語られ始めた。学校の試験で一〇〇点満点の九六点しかとれなかつた

だけで、手厳しく叱られ、なぜ四点間違えたのか、徹底的に間違いの原因を追及され、責め続けられて、わからないと殴る、蹴るなどの暴力を振るわれた。そうかと思うと、時にころつと機嫌が変わって、お菓子を買ってくれることもあったという。しかし、内容の割に口調は冷静で、父親に対して憎しみや恨みを述べることもない。

ただ、母親との面接を進めて後半になると、子どもの声が小さいながらも時折出るようになった。そして、こちらを見ては怪訝な顔を見せつつも、少し表情が緩むような瞬間を認めるようにもなった。それを確認して、私の見通しは少し楽観的なものになった。

二週間後に再度面接をした。二週間の様子を尋ねた。すると、開口一番、「一週間前に夫の母親が訪ねてきたのですが、母親が子どもを抱くとすぐに泣いたんです。夫がそれを見て、『あ、この子も人見知りして泣くんのだ！』と叫んでいました」と報告した。母親の声にも控えめながらも喜びが伝わってきた。

私は母親の報告を聞きながら、前回と同様に子どもを抱っこしてみた。すると、前回とは異なり、少し戸惑ったような表情を見せるとともに、遠慮がちに母親の方に顔を向けた。でも泣くことはなく、再び私の方に視線を戻した。まもなく再び母親の方に顔を向けて、心細そうな顔を見せた。そこで私は母親に「抱っこしてあげてください」と伝えて、子どもを手渡した。母親は子どもを抱きかかえて自分の胸に押し当てた。当初子どもはどことなく遠慮がちで、母親にしつかりとしがみつくことはなかったが、のけぞったり、母親から目をそらすこともなかった。

面接の前半では、まだ子どもには緊張が少し感じられ、発声もほとんど見られなかった。しかし、次第に子どもは弱々しいながらも「あー」と時折声を出すようになった。前回よりもより確かなものを感じさせた。私は「これはよい兆候だ」と思い、すぐに子どもの声の大きさをテンポに合わせてながら控えめに声で応じるようにしていった。

その後、私はしばらく二人の様子を黙って見守った。そしておもむろに「お母さんに抱かれて安心しましたね」と嬉しそうに伝えた。私は母親に「さきほど赤ちゃんがお母さんの方を見たとき、お母さんはどんな気持ちがしましたか」と尋ねてみた。すると母親は少し遠慮がちに「心細そうでも不安そうな表情をして、私を求めました」と語った。それは母親にとって初めての体験だったことがわかった。私は感動で胸が熱くなった。

再び母親は私の方に子どもを向けて膝の上に座らせて話し始めた。しかし、前回と違って、子どもは後ろにいる母親の首のあたりに腕を伸ばしてさかんに触りだした。すると母親はその手を払いのけた。そんなやりとりが何回か繰り返された。そこで私は母親に「赤ちゃんはお母さんに触りたいようだから、触らせてやって」とやさしく伝えた。母親は私の助言に素直に従って、子どもがやりたいように相手をすることができるようになった。子どもは最初遠慮がちではあったが、まもなくさかんに触るようになった。母親は子どもを正面から抱くようになり、〈抱く〉抱かれる〉ふたりの姿勢も自然な感じになっていった。私は母親に「抱いた感じはどうですか」と尋ねた。すると、母親は「リラックスしているようですね。身体も以前のよくなる硬い感じがなくなりました」と嬉しそうに語った。

私は母子に限らずいかなる患者との面接でも、こころの動きはからだの動きとして表に現れるものだということをはつきりと意識するようになり、その重要性もより確かなものとなっていったが、最近手にしたアラン・N・シヨアの新著『右脳精神療法<sup>(5)</sup>』を読んでさらに意を強くした。

私は以前から彼に注目し、書評や紹介記事を書いたことがあるが、本書は彼の集大成であるに違いない。

精神療法家であるシヨアは「アメリカのポウルビー」と称されるほどアタッチメント理論に精通し、精神分析と神経生物学とを統合した理論を打ち立てたことでよく知られ、今ではその領域は神経精神分析として認知されるほどになっている。

彼の主張の根幹は明快である。一人心理学から二人心理学へ、個から関係へ、言語から情動へ、理性から感性へ、意識から無意識へ、大きく舵を切るパラダイムシフトを唱えている。その根拠をこの数十年間の神経生物学の知見に求めている。そこでも左脳から右脳へ、認知から情動へ、中枢神経から自律神経へ、一つの脳から脳と脳の連関へ、大きく舵を切っているのである。

今や虐待臨床に限らず、発達障害領域でもアタッチメントに注目が集まりつつある。アタッチメントにまつわる事象とそこでの体験が子どもに与える影響は計り知れないものがある。シヨアも論じているが、それは子どものみならず大人にみられる大半の精神疾患の成因にも深く関係するからである。

#### 〔文献〕

(1) 土居健郎「勘と勘繰りと妄想」(高橋俊彦編)『分裂病の精神病理学』15頁、一九八六年(土居健郎)『日常語の精神

医学』三四八―三六六頁、医学書院、一九九四年所収)

(2) 小林隆児「書評 アラン・N・シヨア著『情動調整障害と自己の障害/情動調整と自己の回復』」『そたちの科学』二号、一一八頁、二〇〇四年

(3) 小林隆児「こころと脳をつなぐ架け橋としての情動と愛着― Allan Schoreの理論を中心に」『小児看護』三一巻六号、七三―七三六頁、二〇〇八年

(4) 小林隆児(二〇一一)「関係からみた『勘と勘繰りと妄想』(土居健郎)『精神療法』三七巻三号、三二七―三三六頁、二〇一一年(小林隆児『あまのじやくと精神療法』弘文堂、四七―六八頁、弘文堂、二〇一五年所収)

(5) Schore, A.N.: Right Brain Psychotherapy. New York, Norton, 2019.

(6) Stern, D.: Forms of Vitality. London, Oxford University Press, 2010.

(7) 谷川渥『芸術をめぐる言葉』美術出版社、一四一―一四九頁、二〇〇〇年